残響するメスメリスム
——十九世紀の神秘思想にみる動物磁気流体概念の帰趨

奥村大介

はじめに

ドイツ生まれの医師メスメル（Franz Anton Mesmer, Frédéric-Antoine Mesmer, 1734-1815）は十八世紀末のパリで〈動物磁気〉なる概念に基づく治療術を実践していた。のちにメスメリスム（le mesmérisme）と呼ばれるようになるこの治療は、宇宙にあまねく拡がる不可視・不可秤量にして磁気的な〈流体〉をコントロールし、人体内部のこの流体の流れを整えることで、心身の疾患を治療するという医術であった。今日では、一種の催眠術であったと考えられるこの治療実践は、十八世紀末から十九世紀にかけて、当初はメスメルが活動したパリを中心に、やがて欧州各地、そして新大陸にも拡大する一大流行となった。医術としてのメスメリスムは、フランス科学アカデミーなどの批判的調査を受けて疑問視する声が高まり、やがて激しい批判や中傷のうちに衰退するに至る。メスメルも歴史の舞台から姿を消す。だが、その後もメスメリスムは、芸術・思想・宗教などの広範な文化領域に影響を与え続け、その流れは現代にまで続いている。芸術方面への影響については、すぐれた研究書がつとに刊行されており[1]、また筆者もこれまでの論攷のなかで取り上げてきた[2]。

本稿では、治療実践としてのプレザンスを失ったのちのメスメリスムが十九世紀の神秘思想のなかに残響し展開した経緯を明らかにしてみたい。

一　不可秤量流体としての動物磁気

メスメリスムの中心にあったのは〈流体〉の概念である。メスメルは自らの流体概念を〈電気流体〉と比較して説明している[3]。

この〈流体〉概念の起源は、古くは古代ギリシャの思想のなかに見られる〈アイテール〉（αἰθήρ）——原意は「光り輝くもの」——や〈プネウ

マ〉（πνεῦμα）――「気息」や「空気」の意――に遡る。アリストテレス（Aristote, 384-322 av. J.-C.）は『動物発生論』のなかで次のように記す。

> さて、あらゆる霊魂の能力はいわゆる「元素」とは別の、それらよりも神的な或る物体と関係があるようである。そして諸霊魂が貴賤の程度によって互いに相異なるように、そういった物体も互いに相異なる。すべてのものの精液の中には、精液に生殖力を与えるもの〔いわゆる「熱いもの」〕が内在している。このものは火でも、そういったものでもなくて、精液や泡状のものの中に取り込められた気息と気息のなかに含まれている、星界の元素〔エーテル〕に相当するものである。[4]

このエーテルやプネウマの概念は、紀元三世紀以来の新プラトン主義や、その再生であるルネサンス哲学のなかで、互いに照応しあう大宇宙（マクロコスモス）と人間（ミクロコスモス）の紐帯たる〈精気〉（spiritus）として、他方でキリスト教の三位一体において〈神〉と〈人の子〉を結ぶ〈聖霊〉（Spiritus sanctus）として中世を通じて、言及され続けてきた。[5] 煎じ詰めて言うならば、宇宙的原理と人間世界とを結ぶ仲介者としてさまざまな思想伝統のなかで受け継がれてきた聖なる概念であった。

この概念が科学革命の時代を経て、聖なる文脈を徐々に離脱した自然学的観念として現れたものが、十七世紀から十九世紀にかけての科学文献に現れる〈流体〉（les fluides）の概念である。流体は、さまざまな自然現象を説明する実体的概念として想定されたものであった。磁力現象を説明する磁気流体、電気現象を説明する電気流体、熱現象を担う熱素、燃焼現象に関与するフロギストンなど、眼に見えず測定することもできないため〈不可秤量流体〉（le fluide impondérable）と呼ばれる精妙な流体の概念が仮構された。[6] 遠隔的に伝達する重力や光の作用を説明する際には、アリストテレス自然学において天上界を満たす不可視・不可秤量の物質された古（いにしえ）の〈アイテール〉が意味内実を変化させた〈エーテル〉（l'éther）概念が用いられ、これも一種の流体として捉えられた。これらの流体は十八世紀までは説得的な概念であったが、この世紀の後半に、燃焼現象の本質が酸素という元素との結合であることが解明され（酸化反応）、十九世紀には熱がエネルギーとして捉えられ（熱力学）、電気と磁気が電磁場の概念によって記述されるようになると（電磁気学）、それぞれの現象を説明していた流体概念は、自然学上の説明原理としては、姿を消してゆく。[7] 最後まで残ったのは光と重力の伝達機序の解明であるが、そのために要請されていたエーテル概念は、世紀転換期に、光の説明原理として不要であることが明らかになる。[8]

メスメルの理論における流体も、この不可秤量流体の一種と考えることができる。そしてメスメルにおいてこの流体は、治療の機序を説明するために導入された表象ではなく、現に存在する実体と捉えられていた。たとえばメスメルは治療に際して、磁気流体を溜める磁気桶（le baquet）

なるものを使用したが、ガラスや鉄棒などで構成されたこの装置は明らかに、電気を溜める装置であるライデン瓶――本質的には一種のコンデンサーなので瓶形状である必要はないが当時は電気流体が文字通り瓶のなかに溜まると考えられた――を模したものであり、メスメルは磁気流体を実在物と認識していた。

二　磁気流体の消息

メスメリスムは「フランス大革命に先立つ十年間に、測りしれぬほどの関心を集めた」[9]。メスメルの一派は調和協会（Société de l'Harmonie）なる結社をつくって、メスメリスムの普及をはかり、この活動は順調に成果をあげる。会員には著名な官僚、法律家、医師、貴族らが名を連ねた。そしてこの協会は、フランス大革命へと至る政治的急進思想を育む秘密結社のような役割をも果たす。一七八四年、このメスメリスム熱を看過できなくなったルイ十六世（Louis XVI, 1754-93）は王立科学アカデミーならびに王立医学アカデミーの会員からなる審査委員会、さらに王立協会からなる調査委員会を発足させる。両委員会の結論は「〈磁気流体〉なるものの物理的に存在する証拠は全くみつからなかった」というものであった。そして、それは想像力（l'imagination）の作用と結論づけられた。以後、メスメリスム批判の著作が次々と刊行されるようになる。さらに同年、プロイセンのハインリッヒ大公（フリードリッヒ大王の弟）の前でメスメルが行なった治療実演が失敗に終わり、メスメルは激しく落胆する。翌一七八五年の初頭、メスメルはパリを去り、歴史の表舞台から姿を消した。メスメルが消息を絶つのと相前後して、弟子のピュイゼギュール侯爵（Amand-Marie-Jacques de Chastenet, Marquis de Puységur, 1751-1825）は動物磁気治療術を〈磁気睡眠〉（磁気による眠り le sommeil magnétique）と捉えるようになる。そしてこの概念は後の〈催眠〉（l'hypnotisme）概念へとつながるものであり、実体的な磁気流体の作用としてのメスメリスムあるいは動物磁気概念は医学史の後景へと退くことになる。

メスメリスム運動、あるいは文化のなかに拡散した思想としてのメスメリスムは、メスメルが失脚したのちも多様な展開を見せる。メスメルの支持者ないしは継承者たちのなかでは、メスメル自身が主張した物理的実体としての磁気流体概念を採用する者もあれば、実体としての流体の存在は肯定せず、その治療効果を別の機序で説明した者もあった。メスメリスト――メスメルの治療術の実践者――たちの立場を大別すれば、物理的な実体であれ仮想的な表象であれ流体を認める流体派（les fluidistes）と、流体にはこだわらない、あるいはこれを否定する非流体派（あるいは生気論者）（les antifluidistes ou les animistes）に二分することができる[10]。メスメリストの範囲でいえば、大まかな推移としては、メスメル自身の影響力が失われていくにつれて流体派は減少し、非流体派が主流になる[11]。だが、必ずしもメスメリスムの実践者ということに限定せず、メスメリスムの影響を受けた思想家・宗教家・文学者などを含めるなら、流体派はその後も命脈を保ち続ける。また、流体派のなかでも、表象としての

流体として、いわば流体を物理的実在物ではなく心理的存在とみなす立場のメスメリストとして、ピュイゼギュールに加えてジョゼフ・ドゥルーズ（1753-1835）などを数えることができるが、この立場がのちのフロイトに連なる力動精神医学の歴史を形成してゆくことになる。[12]

三　催眠の探求

治療術としてのメスメリスムにおいて、物理的実体としての流体概念は、メスメルの亡き後、衰退してゆくなかで、催眠の概念が形成されてゆく。

一八四一年に磁気術師ラフォンテーヌ（Charles Lafontaine, 1803-92）によるメスメリスムの実演を見聞したイギリスの外科医ブレイド（James Braid, 1795-1860）が[13]、これを磁気流体の作用ではなく、施術者の言葉・身振り・凝視などによって生じた心理的現象として捉え、このような作用を催眠（l' hypnotisme）と呼んだ。以来、メスメリストのなかで物理的実体としての磁気流体が存在すると主張する論者は鳴りを潜めるようになる。

ブレイドの催眠概念は、パリにあるサルペトリエール病院の神経科医であるシャルコー（Jean-Martin Charcot, 1825-93）によって、ヒステリーとの関係で研究される。シャルコーは催眠を利用して、患者のヒステリー症状を自在に現出させ、これを自らの講義において実演してみせた。シャルコーは催眠をヒステリー患者に特有の現象と考えた一方で、フランス北東部の都市ナンシーの内科医リエボー（Ambroise-Auguste Liébeault, 1823-1904）もまたメスメリスムを研究するなかで、この治療術が磁気流体なるものの作用でないとの考えに至っていたが、ヒステリー患者以外にも催眠現象が引き起こせることを発見し、のちにこの研究成果をナンシー大学医学部教授ベルネイム（Hippolyte Bernheim, 1840-1919）が理論化し、今日に至る催眠療法の基礎を成す。

シャルコーらのサルペトリエール学派（パリ学派）にせよ、リエボーらのナンシー学派にせよ、催眠が生じるのは〈磁気流体〉の働きによる物理・生理現象ではなく、主として施術者の言動によって引き起こされる心理現象とみなした点においては一致していた。

サルペトリエール病院におけるシャルコーの講義に列席した数多くの学徒のなかには、若きフロイト（Sigmund Freud, 1856-1939）の姿があった（フロイトのパリ留学は一八八五年）。催眠という現象は、当のヒステリー患者自身に自覚されない言動を伴う。このことが、人間の意識には当人にとって覚知されない何らかの領域や作用――無意識――があるというフロイトの着想につながっていったことはつとに知られている。[14] 同時に注目すべきは、すでにシャルコーにおいて実体視されていなかったメスメルの磁気流体概念が、フロイトにおいてはリビドー（libido）という表象となって復活していることである（この語をフロイトが最初に用いたのは、フリース［Wilhelm Fliess, 1858-1928］宛の「草稿E」において、

一八九四年六月と推定されている[15]。フロイトにあってリビドーは実体ではなく表象であるが、フロイトがリビドーの固着性（Haftbarkeit zur Fixierung）あるいは固着能力（Fähigkeit zur Fixierung）、粘度（Zähigkeit）、粘着性（Klebrigkeit）、慣性（Trägheit）といった言葉を用いるのは、「リビドーを液状の流れと考えていたことを想起させる[16]」。

四　催眠下の超感覚――心霊思想へ

メスメリスムがその理論的中核に流体概念を備え、かつメスメルの術を施された者が異常な能力を発揮することは、すでにメスメルの弟子であるピュイゼギュール侯爵（Amand-Marie-Jacques de Chastenet, Marquis de Puységur, 1751-1825）が発見していた。ピュイゼギュールは、若き農夫ラースに磁気術を施すと彼は痙攣的な発作を起こすことなく特異な眠りに落ち、平素とは異なる言動をすることに気がついた。学問のない農夫であるはずのラースが優美なフランス語で話し、高尚な話題について意見を述べ、あまつさえ相手の考えを読みさえしたのである。この眠りをピュイゼギュールは〈磁気睡眠〉と呼んだ（これは十九世紀の半ばにブレイドが〈催眠〉と名付けた現象を先取りするものといってよい）。

さらに、一八四八年のハイズヴィル事件[17]後、流行する心霊術によって引き起こされた（とされる）さまざまな超常現象は、メスメリスム施術下の患者が示した症状と顕著な類似を示したことで、メスメリスムは心霊術の圏域に引き入れられる。その結果、メスメリスムの発端にあった流体概念は、神秘的な現象を生じさせる精妙な物質として捉えなおされる。動物磁気が催眠療法とみなされていくようになる治療実践の領域では、流体概念は後景に退くか、純粋に心理的存在、あるいは表象としてのみ残存していたが、一八五〇年代・六〇年代に展開した心霊思想や心霊術の実践のなかで、実体としての流体概念が復活していくのである。ここでは二人の神秘家の思想のなかに、メスメル的な流体概念の展開を見てみよう。

A　エリファス・レヴィ

近代オカルティズムの祖と位置付けられるユダヤ教神秘主義（カバラ）の思想家エリファス・レヴィ（Alphonse-Louis Constant, dit Éliphas Lévi, 1810-75）には「コレスポンダンス」という詩がある（『三つの調和』所載）。ボードレールの同名詩篇に影響を与えたことで知られるこの詩のタイトル、「コレスポンダンス」＝万物照応とは、ルネサンスの自然魔術の前提となる自然観で、大宇宙（マクロコスモス）と人間（ミクロコスモス）、あるいは精神と物質の間に直接の照応・影響関係があるとする観念である。

レヴィは主著『高等魔術の教理と祭儀』（第一巻、一八五四）[18]において述べる。「人間は〈ミクロコスモス〉、すなわち小宇宙であり、そして照

応の教義に従えば、大宇宙のなかにあるものはすべて小宇宙で再生される」（p.182　邦訳一一二）。そして、レヴィのいわゆる高等魔術は、この相照らしあう両世界に対して「想像力」により働きかけ、奇跡を生じさせることであるとされる。

想像力は、事実、魂の眼のごときものであり、形態が描かれ保たれるのは、そのなかにおいてであり、われわれが不可視の世界の反映を見るのもそれを通じてであり、想像力こそ幻影の鏡、魔術的生命の装置である。この力を通じて、われわれは病気を癒し、季節に影響を及ぼし、生者から死を遠ざけ、死者を蘇らせることもできるのである。なんとなれば、意志を高揚させ、〈万物の作因〉を把握させるのは、これだからである。（p. 117　邦訳五三頁）

注目すべきは、この想像力が一種の磁気流体的な性質を帯びているとレヴィが述べていることである。「われわれのなかにあって想像力と呼ばれるものは、〈磁気的大作因〉（le grand agent magnétique）、すなわち生きた光のなかに含まれている映像や反映をわが物にする、われわれの魂に生まれながらに備わった特性にほかならない」（p. 167　邦訳九八頁）。そして、この〈磁気的大作因〉なるものは、メスメリスムから得られた概念であり、それは〈星気光〉（la lumière astrale）[19]という精妙な光として捉えられもする。

「［…］〈魔術の大作因〉（le grand agent magique）と呼ばれる〈星気光〉、すなわち地上の流体は、カバリストたちが述べるように、われわれの魂が呼び起こし、その〈透明性〉に服従させることが可能なあらゆる種類の形象、すなわち反映で充満している。これらの形象は、つねにわれわれの前にあり、覚醒時のよりいっそう強烈な焼印、すなわちわれわれの想像力を〈星気光〉の目まぐるしいパノラマの方向へ向けさせない別の関心事によってしかかき消すことはできない。眠っているときには、その眺めが自ずとわれわれの眼前に現れ、こうして夢が――筋道の立たない、とりとめのない夢が生み出される。われわれの理智の気づかぬ間に、なにか強い意志が睡眠中も活動し続け、その妄想に一つの方向を与える場合は別であり、そのとき夢は幻視に変容する。

〈動物磁気〉（Le magnetisme）とは、片方が眠っている間にもう一方は目覚めている二つの魂の自発的もしくは強制的結合によって産み出される人工的睡眠に他ならない――すなわち、夢を幻視に変え、形象の助けを借りて真理へ到達するために、反映の選択にあたって、一方が他方を導くかたちになる。

だから催眠術にかかった人間は、術者が送り込むところへ実際に赴くのではなく、〈星気光〉のなかにあるその形象を思い浮かべるのであ

って、その光のなかに存在しないものは何も見ることができない。

〈星気光〉は神経へ直接働きかけ、動物組織のなかで神経がその導体となって、星気光を脳へ運ぶ。したがって、催眠術にかかった状態のなかでは、光の輝きに頼らず、神経の助けを借りて見ることができるのである。潜在的熱素が存在することを物理学が認めているように、霊的流体は潜在的光であるからだ。(pp. 171-172　邦訳一〇二―一〇三頁)

たとえば催眠下の人間が肉眼では見られない遠方のヴィジョンを得る、いわゆる〈千里眼〉のような現象も、この〈星気光〉が媒介となって遠隔地点間を結びつけることで説明できるというわけである。しかも、十八世紀から十九世紀前半にかけて、熱力学の成立前夜に、熱現象を説明していた流体である〈熱素〉の実在を根拠として、霊的流体の存在が語られているのである。

B　カルデック

心霊術（le spiritisme）の探求成果を体系化したのは、フランスのアラン・カルデック（Allan Kardec, 1804-69）である。カルデックは「霊から与えられた」という筆名であり、本名はイポリット＝レオン＝ドゥニザール・リヴァイユ（Hippolyte-Léon-Denizard Rivail）で、教育思想家として知られる。

カルデックの議論において、われわれの生きる物質世界に霊が現れること、すなわち心霊現象を説明する際に導入されるのが普遍流体（le fluide universel）という概念である。これは仮想的・表象的なものではなく、実体として存在するものとされ、磁気的・電気的な流体とも関係するものとして、かつ催眠との関連において語られるものであり、メスメルの磁気流体概念の圏域にある概念とみなすことができる。カルデックは一八五七年の著書『霊の書』においてこの流体の概念を述べているが、この書はカルデックが発した問いに〈霊〉が答えるという問答体（カテシスム）の形で記されている。その霊は、聖ヨハネ、聖パウロ、ソクラテス、プラトン、スヴェーデンボリらの霊という場合もあれば、特定の名を示さない霊である場合もあるが、いずれも交霊術の方法により、カルデックが霊から言葉を受け取ったという体裁になっており、霊の言葉とされるものは引用符（ギュメ）つきの直接引用として記されている（問答の冒頭には一から一〇一九までの通し番号が付され、最後にカルデック自身による「結語」が附されている）。

次の問答は流体概念について端的に霊が（?）語っているもので、霊の世界とわれわれの　物質世界を普遍流体が仲介することを述べている箇所である。

二十七　それでは、宇宙には二つの普遍的要素、物質（la matière）と霊（l'esprit）があるということになりますか。

〈然り。そして何よりもまず、万物の父であり創造主である、かの神がある。この三つが、存在するすべてのものの原理であり、普遍的な三位一体である。だが、さらに、普遍流体（le fluide universel）が付け加えられねばならない。本来、物質的要素は霊が影響を及ぼすには粗雑すぎるので、霊と物質とを仲介する役割を果たすのが流体である。この流体は見方によっては物質的要素に分類しうるが、特別な性質によって、物質とは区別される。もしそれが真に物質であるとすれば、霊もまた物質でないとは言えなくなってしまうだろう。

それは霊と物質の間に位置する。物質が物質であるように、流体は流動的であり、物質との無数の結合によって、霊の作用の下で、人間が知っているのはその極一部に過ぎない無限に多様な事物を生み出すことができる。この普遍的、原始的、あるいは根源的な流体は、霊が用いる媒介者であり、原理である。この原理がなければ、物質は永遠の分裂状態に置かれ、重力の与える性質を決して獲得しないのである。〉

――この流体は、私たちが電気と呼ぶ流体なのでしょうか。

〈すでに述べたように、この流体は無数の組み合わせの影響を受けやすい。人間が電気流体、磁気流体と呼ぶものは、普遍的流体の変化したものにすぎず、厳密に言えば、より完全で精妙な物質であり、独立した存在とみることができるものだ。〉

さらに、この普遍流体は人間の眼に見える形をとることがあるという。

八十八　霊は一定で変わらない形をもっているのでしょうか。

〈人間の眼にはそうは見えないが、われわれにはそのように見える。もし人間に見えるとすれば、一種の焔、微光、あるいはエーテル性の火花（une flamme, une lueur ou une étincelle éthérée）だ。〉

――その焔や火花には何らかの色があるのですか。

〈人間に見えるとすれば、薄暗いものからルビー色の輝きまでさまざまで、それは霊の純粋さによって異なるのだ。〉

霊そのものは、物質世界の人間には、直接視ることはできない。だが、霊的世界と物質世界とを仲介する流体が霊の周囲を覆っており、これが眼に見えるようになるという。この覆いのことをカルデック（が問うた霊）は、霊の外被（périsprit）と呼ぶ。

九十三　厳密には、霊はそれだけで独立して存在しているのでしょうか、それとも一部で言われているように、何らかの物質（une substance）に囲まれて存在しているのでしょうか。

〈霊は、君たちにとっての蒸気のような物質に囲まれている。もっとも、この物質もわれわれにとっては甚だ粗雑なものだが、それでもこの物質は、大気のなかに立ち昇り、どこにでも移動することができるほどに蒸気的なものだ。果実の胚が外胚乳（périsperme）に覆われているように、霊の本体も覆いに包まれており、この覆いを霊の外被（périsprit）と呼んでもよいだろう。〉

九十四　霊はその半物質的な覆いをどこから得るのですか。

〈各惑星の普遍的流体のなかから得ている。したがって、すべての世界で霊の覆いが同一なわけではない。人間が服を着替えるように、霊は或る世界から別の世界に移り変わるときにその覆いを変える。〉〔…〕

古今の神話や伝承、宗教画や神秘思想のなかには数々の霊光現象――後光、ニンブス、鬼火、人魂など――が現れるが、カルデック（の交信した霊）によれば、これらは普遍流体の現れとして説明される。これは、フランスで後に生理学者シャルル・リシェ（Charles Robert Richet, 1850-1935）――アレルギーの研究によりノーベル賞を受賞したこと知られる――が心霊現象を研究し、一八九三年に、霊媒から発生する神秘的な半物質的存在を発見しエクトプラスム（l'ectoplasme）と呼んだことに連なる。[20] この反物質的な外被は「触知可能な形」をとることさえあるという（問答九十五）。これにより霊が物質世界に直接作用する物体の移動や浮揚といった現象、「霊の手」に体を触れられるといった心霊体験も説明される。

結語

アリストテレスのエーテル以来の〈精妙な流体〉の概念は、新プラトン主義、中世のキリスト教神学、ルネサンスの自然魔術思想などを経て、初期近代以降、自然学上の〈流体〉概念となった。流体概念の形成された時代は、自然に対する認識が世俗化――宗教的文脈から離脱――してゆく過程が進行した時期である。そして、この初期近代から啓蒙時代に至るさまざまな流体概念の一種として現れたメスメルの磁気流体による〈治療〉も、祓魔師が行なっていた神秘的な〈悪魔祓い〉の技を、自然学的な流体の作用として捉えなおした「合理的な」ものであった。メスメリスムは啓蒙主義の嫡子であった。それにもかかわらず、メスメルの流体にはルネサンス以来の自然魔術や祓魔術の神秘的な残滓があったというべきか、続く世紀において、複雑な展開をみせた。

メスメルの流体概念に対して十九世紀に生じたことは、治療実践のなかでは実体的概念から心理的概念へと移行したのちに流体概念そのものが衰微してゆく過程であり、それは心理的現象を説明する〈表象〉として、この世紀の後半にフロイトのリビドー概念を形成した。他方で生じたことは、流体概念が、隠密思想や心霊術において、神秘的現象が成立するための根拠となる〈実体〉として捉えられるようになったことであった。初期近代において聖なる文脈を離れた〈精妙な流体〉は、メスメルにおいても、仮にそれが神秘的に映る局面があったにせよ、基本的には自然学的な言説のなかに収まりうる実体概念であった。それが治療実践の場面で脱実体化していくとともに、理論的には実体概念として復活するのが神秘思想のなかであったことは興味深い。折しも、一八六五年、その後二十世紀以降の物理学の正統となっていく電磁気学の〈電磁場〉概念がマックスウェル（James Clerk Maxwell, 1831-79）によって提唱されるが、それは依然として不可秤量流体としてのエーテル概念に依拠していた。[21] 十九世紀の半ばにおいて、科学も神秘も、眼に見えず質量を秤ることもできない〈精妙な流体〉を必要としていたのである。

（1） Maria Tatar, *Spellbound: Studies on Mesmerism and Literature*, Princeton [N.J.], Princeton UP, 1978〈鈴木晶訳『魔の眼に魅められて』国書刊行会、一九九四年〉を参照のこと。なお、メスメリスムの歴史全般については Robert Darnton, *Mesmerism and the End of the Enlightenment*, Cambridge [Mass.], Harvard UP, 1968（ダーントン、稲生永訳『パリのメスマー』、平凡社、一九八七年）が古典的研究書。メスメリスムと流体概念については、吉永進一「「電気的」身体――精妙な流体概念について」（『舞鶴工業高等専門学校紀要』、第三一号、一九九六年三月、一一三―一二〇頁）が重要な先行研究である。

（2） 拙稿「メスメリスムの文化史」、『東京大学大学院教育学研究科紀要』、第五四巻（二〇一四年度）、二〇一五年三月、一―一三頁。

（3） Mesmer, *Mémoire sur la découverte du magnétisme animal*, Genève et Paris, P. Fr. Didot le jeune, 1779, p.74. メスマー、本間邦雄訳「動物磁気発見のいきさつ」、『キリスト教神秘主義著作集』、第一六巻、教文館、一九九三年、三一六頁。

（4） アリストテレス、島崎三郎訳『動物発生論』七三六b、アリストテレス全集第九巻、岩波書店、一九六九年、一六三頁。

（5） 大野英士『オカルティズム――非理性のヨーロッパ』講談社選書メチエ、二〇一八年、四五―四八頁。本書は近代オカルティズムのすぐれた通史であるが、とくに〈流体〉概念への注目が全篇にわたって充実しており、本稿を執筆する上で、非常に参考になった。

（6） 不可秤量流体については、次の拙稿を参照されたい。「不可秤量流体概念の形成」、『カルチュール』、明治学院大学教養教育センター、第一六巻、二〇二二年三月、九―二三頁。

（7） ただし、電気流体や磁気流体の概念が失効したのちも、一種の流体概念であるはずのエーテルと電磁場は、電磁気現象の説明原理として併存する。マックスウェルの電磁場は、エーテルをも含む何らかの物質＝実体の状態変化であり、現代の物理学が考えるような、それ自体が独立した実体としての電磁場とは似て非なるものである。

（8） 重力が遠隔的に伝達する仕組みの解明は、二十世紀以降に持ち越され、エーテル概念は否定されたとも、出自の異なる類似概念に交代されたとも評しうる、微妙な帰趨をたどることになる。

（9） ダーントン、前掲書、一四頁。

（10） Jean Starobinski, *La Relation critique*, Paris, Gallimard, 1970; rééd. coll. «Tel», 2000, p. 181.

（11）フランスの医師イポリット・パラデュック（Hippolyte Baraduc, 1850-1909）などはメスメリストとしては後期まで残った流体派である。

（12）動物磁気から精神分析の形成に至る精神医学史については、次の大著が今なお最重要の記念碑的研究書である。Henri Ellenberger, *The Discovery of the Unconscious*, New York, Basic Books, 1970（エレンベルガー、木村敏・中井久夫監訳『無意識の発見』、上下巻、弘文堂、一九八〇年）

（13）Gauld, A., *A History of Hypnotism*, Cambridge University Press, 1992, p. 204

（14）エレンベルガー、前掲書など。

（15）ラプランシュ／ポンタリス（村上仁監訳）『精神分析用語辞典』みすず書房、一九七七年（原書第五版、一九七六年の邦訳）、四八五頁。

（16）ラプランシュ／ポンタリス、前掲書、四九〇頁。

（17）一八四八年三月、アメリカ・ニューヨーク州の村ハイズヴィルで、フォックス夫妻の二人の娘（九歳と十一歳）が深夜に木を叩くような音を聴く。やがてその打音の主に対して、娘たち（一説には母親）が問いかけると、例えばイエスなら一回、ノーなら二回の音を鳴らすという具合に、意志疎通が成立するようになった。やがてその音を発する何者かは、自らが殺人事件の犠牲者の霊であり、遺体はフォックス邸の地下にあるというメッセージを発してきた。その後の捜査で実際に邸の地下から人骨が発掘されたため、この現象に信憑性が生じ、十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて交霊術や科学者たちによる心霊現象研究が盛んとなるきっかけとなった。近代オカルティズム史では極めて著名な出来事であり、数多くの文献がある。たとえば、稲生平太郎（＝横山茂雄）「影の水脈」『底本　何かが空を飛んでいる』国書刊行会、二〇一三年を参照。心霊現象研究については、Janet Oppenheim, *The Other World: Spiritualism and Psychical Research in England, 1850-1914*, Cambridge [England], Cambridge UP, 1985（オッペンハイム、和田芳久訳『英国心霊主義の抬頭』工作舎、一九九二年）を参照。

（18）Éliphas Lévi, *Dogme et rituel de la haute magie*, tome 1, Paris, H. Baillère, 1854. 引用は原書一八六一年版を参照の上で、生田耕作訳『高等魔術の教理と祭儀教理篇』人文書院、一九八一年による。ただし、訳文を一部変更した。

（19）生田耕作の訳語では「霊光」であるが、astral が「星」を意味するἄστρον（古希）、astrum（羅）に由来することから星気光と訳す。この訳語は、前掲、稲生平太郎「影の水脈」一六八頁による。

（20）大野、前掲書、二〇三頁。

（21）J. C. Maxwell, “A dynamical theory of electromagnetic field”, Philosophical Transactions of the Royal Society of London, vol. 155, 1865, pp. 459-512.